

生徒参加の学校づくり～海外事例と日本のこれから～



開催日時：2020年8月31日（月） 運営媒体：Zoom

参加者数：20名（高校生・大学生・社会人16名、運営メンバー4名）

話題提供者：山本晃史さん（認定NPO法人カタリバ）

古田雄一さん（大阪国際大学短期大学部准教授）

今回は、2名の話題提供者により国内外の事例について学び「校則・ルールは誰のものか？」「誰がつくる・決めるものなのか？」ということについて、参加者の方々とのディスカッションを通して考えました。今回も様々な立場の方にご参加いただきましたが、「もっと自由な学校をつくりたい」「校則について探究学習を行っているので勉強したいと思った」といった理由で参加してくれた高校生も2名いました。いつもよりも参加者の人数が少なかったのですが、アットホームな雰囲気の中、活発な議論を行うことができたと思います。

まず、アメリカイリノイ州シカゴ学区の事例、スウェーデン・フィンランドの事例についてご紹介いただきました。シカゴ学区では課外活動の一環として「ステューデント・ボイス・コミッティー」を作り、自動販売機の設置や、長期休暇中の宿題の方針などについて生徒が学校の意思決定や問題解決に参画できる仕組みがあります。最初から理解のある教師ばかりではないそうですが、年3回教員研修を行い、内省の機会を通じて生徒参加の意義や関わり方を伝えています。フィンランド・ヘルシンキ市でも若者参画システム「Ruuti」というものがあり、小さな意思決定への参加を積み重ねることを大切にしています。スウェーデン学習指導要領の冒頭には「学校は民主主義土台の上に立っている」とあるそうで、前提となる考え方から日本と大きく違っているように感じました。

海外の事例を紹介していただいた後、日本では何ができるか？という質問が参加者から出ました。「どんな取り組みを行うかなどといった『形』ではなくて『教員の考え方・価値観』を変えることが大事」、「スウェーデンでは教科に関係なく教師は皆民主主義について理解がある」といった教師教育に関する意見が出た後、日本の学校生活におけるシティズンシップ教育の話題へ。「自分の学校で部活の夏の大会をどうしようかと考えている教師がいたが、子どもの意見を聞こうという発想がなかった」、「学校が荒れていた時代を必死で落ち着かせてきた日本の学校教育独自の土壌をどのように捉え、変えていけるのか？」「今は部活が上意下達の企業風土に貢献しているように思える」といった意見が出ました。

そのあと、NPO法人カタリバが中心となって取り組んでいる「ルールメイカー育成プロジェクト」（経産省「未来の教室」事業）についてご紹介いただきました。学校の校則・ルールを題材に、生徒・先生・保護者などが対話を重ね、その存在意義や捉え直しを民主的に行い、課題発見、合意形成、意思決定をする力を育むことを目的とした探究的な学びの取り組みです。生徒たちだけでなく、教員や保護者にとっても納得いくものをつくりあげるシティズンシップ教育の機会になっています。最後は少人数のグループに分かれ、参加者の皆さんで意見交換ができました。話題提供していただきました山本さん、古田さん、ご参加いただきました皆さん、ありがとうございました。（企画運営：古野、別木、報告担当：別木）